

平成29年度 富山市総合教育会議 会議録

1 日 時 平成29年10月23日(月曜日)
午後 4時00分 開会
午後 5時00分 閉会

2 場 所 本庁議会棟8階 第3委員会室

3 出席者 富山市長 森 雅志
富山市教育委員会
教育長 宮口 克志
委 員 若林 啓介
委 員 藤井 久丈
委 員 尾畑 納子
委 員 高田 健

事務局関係

教育委員会事務局

事務局長	酒 井 敏 行
事務局次長（総務・社会教育担当）	大 場 一 成
事務局次長（学校教育担当）	斉 藤 保 志
教育総務課長	酒 井 秀 祐
統合校整備等推進室長	岸 重 臣
学校施設課長	水 高 清 志
学校教育課長	高 木 健 吉
学校保健課長	片 山 建
生涯学習課長	梅 沢 宗 仁
教育総務課主幹	本 郷 由 佳
教育総務課長代理	桑 名 純 一
教育総務課主査	三 辺 さやか

企画管理部

企画調整課長	山 本 貴 俊
企画調整課長代理	岸 聡 之

4 協議題 富山市内の小・中学校の児童、生徒数の現状について

5 会議の要旨

○開 会

○市長あいさつ

○議題 富山市内の小・中学校の児童、生徒数の現状について【学校教育課長説明】

学校教育課長から、富山市内の小・中学校の児童、生徒数の推移とそれに伴う課題について説明があった。また、学校規模によって異なる、よさと課題についての説明があった。

●意見交換

[市長]

過大規模校が1校生じるとのことであったが、そうなった場合、制度上はそれでよいのか。適正を欠いているということになると思うが、学校の新設となるのか。

[教育長]

国においては、過大規模校については、学校を分けるという議論もあるが、やむを得ない場合については新設するという対応もするが、地域、保護者の要望を聞いて適正に対応するようとしている。

市長がおっしゃっていたように、全体的には児童、生徒数は減少しているなかで、住宅団地造成による一時的な児童、生徒数の増加があっても、将来的には減少するわけであるから、そのことを見越した対応をしていかなければならない。

[市長]

小学校は、地域との結びつきが強く地縁性があるので、少人数になったからといって、特に中山間地の遠く離れた学校にある学校との統合は難しいであろう。小規模校には小規模校のよさがあるだろう。

[尾畑委員]

特色も出てくるのではないか。

[若林委員]

法律上の規制もあり、簡単に解決することはできないであろうが、先日学校訪問を行った朝日小学校は複式学級となっている一方で、近隣にある鶴坂、速

星小学校は増加しているということであるから、例えば 5、6 年生だけを異動させることはできないものか。狭い地域に 3 校あり、そのうちの 1 校が極端に児童、生徒数が少なく、他を増築、増設しても将来的に余ってくることは明らかであるのだから、空き教室があって児童数が少ない学校へ異動させることはできないものか。または、校区の決まりを緩めるなどの柔軟な対応をすることで、問題解決できるのではないかと思う。

中山間地で簡単に異動することができない学校は、現状を維持することとして、テレビ授業を取り入れるなどの方法も考えられるだろうが、近隣で複数校あって、アンバランスとなっているのであれば、生徒の異動などで解決できないかと思う。

〔市長〕

平成 14 年 4 月の光陽小学校新設のころは、中心地区の 7 校を 2 校に統合するための議論を活発に行っていて、10 年以上にわたる議論となったが、保護者の思いと地域の思いは異なっていて、母校がなくなることにに対する抵抗感は強いものである。ただ、結果的に 7 校を 2 校にした結果の 2 校の児童数は増加しているのだから、狭い地域にいくつかある学校については、何かうまく対応すれば、子どもにとってもよいかもしい。ある授業だけ移動して、一緒に行くなど。

〔若林委員〕

ある学年だけ移動させるなどという方法もある。

移動手段は検討しなければならいであろうが、新たに 1 校新設して廃校となるということは抵抗などもあり、大変な問題が生じるであろうから、柔軟な対応ができないものかと、学校訪問を行って感じたことである。

都市計画上の問題で、市街化区域とすることができずに住宅が建たず、人口が減ったということもあるかもしれないが、今からこのことについて対応することも意味がないであろう。

〔市長〕

古里小学校校区は市街化区域の長沢地区があるため、住宅が建つことから朝日小学校よりは生徒数が多い。

古沢小学校も昔は生徒数がかなり少なかったが、大学病院が建設されたことにより生徒数は増えた。複式学級とまではなっていないのでは。

〔宮口教育長〕

今年度から複式学級となっている。

〔若林委員〕

小規模校のよさということもあると思うが、あまりに少なくて複式学級となってしまうということは、例えば中学校ではクラブ活動などの選択肢がなくなることや、集団生活の経験が少なくなることから、子どもたちにとって教育上の観点から考えてあまりよくないのではないか。

〔教育長〕

大山地域の福沢小学校と小見小学校は数年前から、市のバスを利用して音楽や体育の授業を合同で行っている。中学校は両校ともに上滝中学校へ入学するということから、年に何回か交流授業を行っている。

〔市長〕

とても離れているのではないか。

〔教育長〕

距離はあるが、行っている。

〔斎藤事務局次長〕

元気な学校創造事業の予算により行っているものである。

〔藤井委員〕

子どものこともあるが、学校の先生の教え方の違いもあると思う。中山間地の小規模校については、そのまま維持していき、近い地域で大規模、小規模があるのであれば、連携体制を作って交流等して行って、連携するなかで異動を行うということも考える必要があるのでは。

〔市長〕

富山市よりも学校維持が難しい状況となっている自治体があるのでは。

山間地を持つ自治体では、近隣に学校があったにもかかわらず、現在は遠方の学校に通っているという自治体もある。

〔尾畑委員〕

例えば、小見小学校のすぐ近隣に立山町の芦嶺小学校があったが、自治体を超えて通学することはできないのか。

〔市長〕

絶対できない、ということはないと思うが、原則的に自治体内での対処を考えるものであろう。

〔藤井委員〕

医療の世界であると、医療圏という考え方があるが、同様に教育圏というように、自治体を超えて連携などを行ってもよいのではないか。

〔市長〕

中学校では、組合立という学校が多くあったが、小学校でそれが無い、というのは自治を含めた最小単位が小学校ということが背景にあって、歩いて行ける範囲で小学校、自転車で行ける範囲が中学校、というようなことがある。

〔若林委員長〕

規則上の距離は定められていたかと思う。

〔教育長〕

中学校では規則上 6 km である。

〔若林委員〕

規則上の距離を柔軟に対応すること、また藤井委員がおっしゃった、単純な校区という考え方から、いくつかの校区をグループ化した中で異動を可能にするなどの方が、新しく学校を新設するよりは資金的にも安価であろう。

〔市長〕

モデル的なことを考えてみてもよいのでは。授業の質を上げたり、体験の機会を増やすためにも、合唱ひとつとってみても人数がいなければ難しい。

ただ小規模な学校であると、子ども同士の関係は密接になりやすいようだ。

〔教育長〕

朝日小学校は、今年度から小規模特認校となっており、校区外からの入学を認めており、朝日地区に多くある空き家を利用した優遇措置もあるが、やはりこれまでの校区を出るまでには至っていないようで、効果はまだ出ていないようである。

〔市長〕

確かに、高山線西側の西本郷地域であれば、朝日小学校へ歩いて行ける距離であろう。

〔若林委員〕

自発的なことに頼るよりは、何らかの制度化が必要ではないか。

〔市長〕

今後増築の必要がある学校は何校あるか。

〔大場事務局次長〕

現在鵜坂小学校が工事中であり、今後必要となるのは堀川南小学校である。

〔若林委員〕

堀川小学校は教室が余っているのでは。そういった部分で柔軟に対応できないか、ということである。

また、財政的なことも考えなくてはならない。教員側の立場から、生徒を異動させることにより教員一人当たりの生徒数を維持させることも必要であるのでは。

〔市長〕

それは地域マネジメントの考えからも、その通りである。ただし、かなり腕力の必要な問題である。単純に賛否の数だけでは解決できない。

冒頭にも申し上げたが、小学校は地縁性が強いので、保育所を統合するということとは異なり、統合したことでよいものを作るといっても難しい。

中学校では可能である。そういう意味で、現在進めている八尾中学校と杉原中学校は同じ方向性があるのでよいが、小学校で同様にすることは難しい。

八尾にはいくつの小学校があるか。

〔宮口教育長〕

八尾、杉原、保内、檜尾の4校である。

〔市長〕

統合は、現状のなかで将来課題として議論していくという段階であって、例えば、3年後には答えを出さねばということほど切実ではないのでは。

〔尾畑委員〕

データは平成34年度までしか出ていないが。

〔宮口教育長〕

現時点での住民台帳に基づくデータであり、今後異動は考えられる。

〔高田委員〕

小学校は、児童数に何人以上という決まりがあるか。

〔宮口教育長〕

決まりはない。

〔高田委員〕

一人でも可能であるということか。

〔宮口教育長〕

一人でも可能である。

〔尾畑委員〕

増える学校が一番問題では。

〔藤井委員〕

流出率、流入率などを加味したデータは作れるか。出生後の予想のようなことが大まかでも出せるものか。

〔市長〕

おそらく難しいだろう。

〔酒井事務局長〕

出生後から小学校入学まで6年間という期間がある。そのなかで例えば堀川南小学校で増えているのは、新しい住宅団地ができたことにより同じ世代の方が住み始めたことによるものである。

〔尾畑委員〕

戸建てであると、賃貸と異なり、ある一定期間のみでの増加となるであろう。

〔若林委員〕

文科省において、ある程度の規模を確保するようという指針を出していたかと思う。そこからはずれているところについては、何らかの対応をしていかなければならないだろう。

〔藤井委員〕

世話好きの方が多いうような、地域力の将来的な指標がわかれば、その地域に若い世代が増えるようにもっていくというようなことができるのではないか。

〔尾畑委員〕

もう少し多様なデータがあればと思ったが、難しいだろうか。

〔市長〕

統計学上は精度が向上していることから、財源があれば可能ではあるだろうが、確定値ではないので、内部資料としては使えても、使いにくいデータとなるだろう。

出生率の方向性はわかっていて、出産可能年齢の人口分布からどれくらい生まれてくるかを推計することは可能ではあるが、もっと多様な要素が関係しているのもので、難しい。

外部からの流入が激しい武蔵小杉のようなところを抱える自治体に比べれば、富山市はまだ推計しやすい状況ではあるだろう。

若干、芝園校区へ引っ越したいという状況はあるようだ。

〔宮口教育長〕

統合当初は、455名であったが、平成27年度には600名を超えている。

〔市長〕

新保小学校は、当初の予想したほど生徒数は増えなかった。

空港付近の市街化により住宅が増えると予想したが、それほど増えなかった。

〔若林委員〕

住みたくなるかどうか、ということもあるだろう。

〔市長〕

先ほどお話しがあったように、何らかの工夫で合同授業を行うとか、学習発表会を合同で行うなどのことは可能であろう。

小規模校の教育の充実のために、できることからアイデアを出していく、ということであろう。

遠くない将来において統合を考えるということであろうが、単に統合するというだけでなく、例えばプログラミング指導に長けた教員を置くとか、英語教員を増やすとか、何か特色をもたせてということもある。

〔宮口教育長〕

学習指導要領は時代のニーズによって変わっていくものであり、小規模校であると、教員数も少なく、校内での教員同士のよい研修が難しく多様なアイデアも生まれにくい、ということがある。それはそのまま子どもにも返るものであり、教員間のよい研修がよい教育を生むということからも、何らかの対応をし

ていかなければならない。

また、学級数は変わらないが1学級当たりの生徒数が減少しているということもあり、様々な課題がある。

〔市長〕

小羽小学校はもうないということでよいか。
大沢野地区に小規模校はあるか。

〔宮口教育長〕

船嶽小学校がある。

〔市長〕

大山は、小見小学校と福沢小学校であるか。
八尾はないか。

〔宮口教育長〕

檜尾小学校がある。

〔市長〕

婦中は朝日小学校であるか。

〔宮口教育長〕

そのほか、水橋東部小学校が複式学級である。

〔若林委員〕

いくつかのパターンを考えてみるというやり方もあるだろう。

〔市長〕

整理すると、過少規模校は7校ほどであるか。

〔宮口教育長〕

将来的には10校となる見込みである。

〔市長〕

複式学級はできれば避けたいところであろう。
今回この会議で現状を把握できたことはよかったと思う。

○閉 会